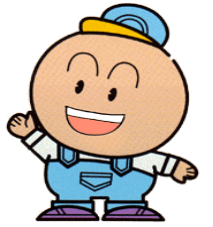


大豆栽培管理情報 (第1号)

「土づくり」・「排水対策」・「種子更新と病害虫の発生防止」の徹底で、収量品質の向上

1 土づくり

～土壌 pH の改善と堆肥の施用、根域の拡大～



(1) 土壌 pH の改善

土壌 pH が低下すると、養分の吸収が阻害されて生育が悪くなり、収量が低下します。アルプス農協管内の土壌 pH は 5.4～5.8 の圃場が多いため、pH6.0～6.5 を目標に粒状貝化石を 150～200 kg を施用しましょう。

(2) 堆肥の施用

堆肥の施用により地力が向上し、収量の増加やしわ粒の発生低下が期待できます。大豆の作付回数が多い圃場では、土壌中の有機物の分解が進み、地力が低下するので、発酵鶏ふん(100～200 kg/10a)などを積極的に施用してください。

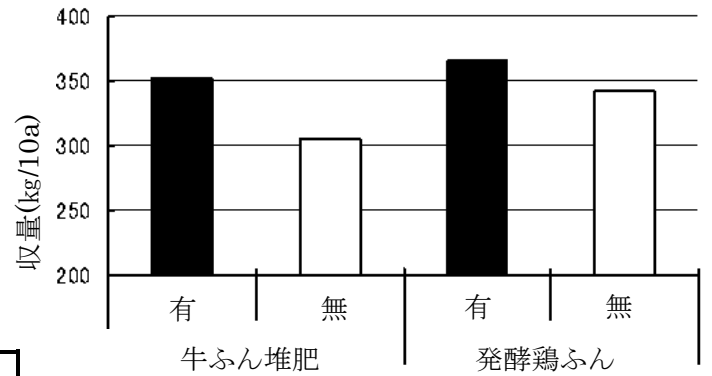


図1 堆肥施用の有無と収量の違い

表1 堆肥の種類別施用量の目安

堆肥の種類	牛ふん堆肥	豚ふん堆肥	発酵鶏ふん	粃がら堆肥
10a 当たりの施用量	1～2t	0.5～1t	100～200kg	1～2t

(3) 根域の拡大

作土層 20cm を目安にプラウなどで深耕しましょう。深耕により根域が拡大し、生育量及び収量の確保が期待できます。

2 排水対策

～播種前に排水対策を万全に～

大豆栽培の基本は、排水の良い圃場づくりです。排水不良の圃場では、湿害による出芽不良や生育抑制だけでなく、病害や雑草の発生等を助長します。また、適期の耕起・播種作業や培土作業等にも支障をきたしますので、播種前に排水対策を徹底しましょう。

<排水対策のポイント>

- ① 用水路や水口からの漏水をしっかり防止する。
- ② 額縁排水溝の設置や心土破碎を実施していない場合は、早急に実施し、圃場の乾きを促進する。
- ③ 額縁排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への確実な連結など、速やかに排水ができるようにしておく。

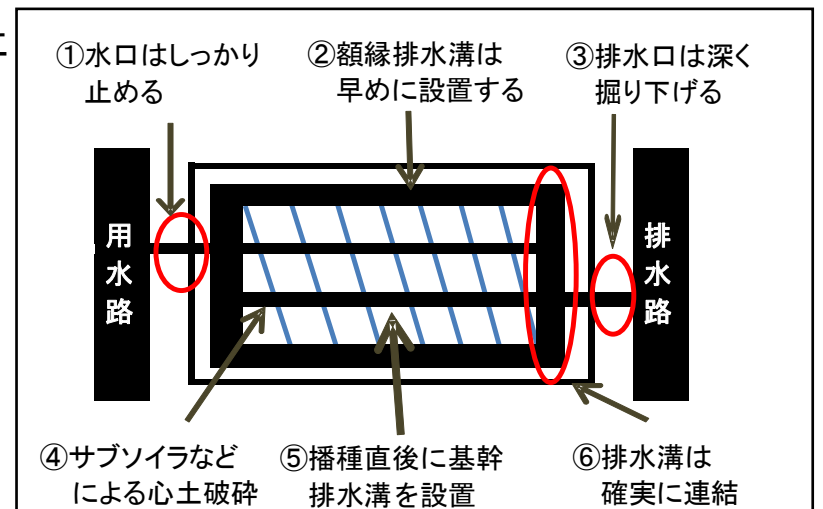


図2 排水対策の手順

3 種子更新と病害虫発生防止

～ 初期病害虫の発生防止 ～

毎年種子更新を行いましょう。自家採種を行うと、品種特性の退化や紫斑病、ウイルス病等の種子伝染性病害発生等の原因となります。また、種子伝染性病害や初期害虫の発生を防止するため、薬剤の種子塗抹を行いましょう。

表2 大豆の種子塗抹処理剤と処理方法

薬剤名	処理法	対象病害虫	使用上の注意
クルーザーMAXX	乾燥種子1kg当たり 原液8ml 塗抹	アブラムシ類、タネバエ、ネキリムシ類、フタスジヒメハムシ 茎疫病、紫斑病、苗立枯病、リゾクニア根腐病、黒根腐病	塗抹後、種子を十分に乾かす。

